

博物館活動の展開と地域住民の意識変化

— “三島村ミュージアムプロジェクト” を通じて —

川宿田好見・平川ひろみ

1. はじめに

筆者らは、これまで“極小規模離島村”である鹿児島県三島村を対象とした考古学的・博物館学的活動を続けてきた（川宿田・平川2012；平川・川宿田ほか2012a, b, c；ほか）。また、2011年秋より、川宿田を代表者とする科学研究費補助金・研究活動スタート支援「“極小規模離島村”における持続可能な博物館活動モデル構築のための実践的研究」を開始し、実践的活動「三島村ミュージアムプロジェクト」を進めている。これは、人口減少に伴う過疎化など深刻な問題を多く抱える離島・へき地において、望ましい博物館活動のあり方についての新しいモデルの構築をしようとするものである。以上の活動を通して、地域の文化財資源を用いた地域活性化の推進も同時に意図している。

本論では、本事業に関する活動について事例を紹介しつつ報告するとともに、地元文化財の活用や博物館活動に関する住民の意識についての調査結果を分析し検討するものである。

2. 地域活性化

地域活性化というと、経済的向上や人口増加・維持、地域の自立といったタームが使用されることが多く、様々な研究や実践がある（e.g. 橋詰2003；高瀬・伊藤2007）。しかし、「そもそも地域活性化という概念自体が整理されておらず、何を達成すれば活性化したといえるかが明確になっていない」（藤本2011：148）という指摘があるように、地域活性化について必ずしも確固とした定義や普遍的な理解があるわけではない。そのため、実際には目標やその内容は多様なものがみられる。よって、地域活性化に取り組む場合、その実行者はいかにして活性化を成し遂げるかという方法だけでなく、活性化の目標や到達点を独自に定める必要がある。

我々は、三島村で当初から地域活性化を意識して活動してきたわけではない。三島村に関する考古学的・博物館学的調査活動を通して、現代社会の中で様々な問題を抱える“極小規模離

キーワード：博物館、博物館活動、パブリック考古学、地域活性化、文化財、離島

島村”にいろいろな形でコミットし実態を知ってきたことや、活動を通じて住民が地元の文化財を再認識し理解するなど“文化財経験”によって元気・希望・活力を回復するのを多々目にしてきた。そのような中から文化財というのは、住民の誇りや地域に対するアイデンティティという“基盤”に関わりうるがゆえに重要なものであり、未来に向けて住民が意思決定をし、希望を持ってアクションを起こすのに寄与する重要な資源であると確信するに至った経緯がある。

地域活性化とは、地域住民がやる気に満ちている状態にあり、その状態が維持されるようになることである、と筆者らは考えている。そして、地域活性化を最も効率よく促進するとともに力強い基盤となる道具こそが「歴史」であると確信している。「人は歴史好きである」といわれるが、まさにそこに立脚して、誇りや地域的アイデンティティという精神的・基盤的レベルを確固としたものにしようとするのである。国境問題、宗教・民族問題、国際関係などに歴史認識が大きく関係しているのはいうまでもない。ただし、そうした意味での「歴史」が「歴史的経緯」を意味するという表層的な理解であってはならない。国や地域、エスニック集団から、地域コミュニティや家族、個人まで、固有の歴史というのは、凡そ人と社会集団を長期的に維持するうえで必要な条件の核心部分にあたると考えられる。固有の歴史は人や社会の大きな拠り所となるものであり、アイデンティティの確立・確認・強化などに役立っているのである。これは、自己を個体外部に限りなく拡張できる後期ホモ・サピエンスの認知基盤と関わると考えられる。新石器時代半ば以降の定住化と人口増加の促進に伴い、問題を調停し社会の維持に働く装置が、モニュメントなどの象徴物やそれを利用した儀礼であり (e.g. 松本2006)、また固有の歴史であると考えることができる。儀礼・祭りが断絶し、伝承や固有の歴史を知らない構成員が増えつつある地域コミュニティが多くなっているが、新石器時代以来の社会維持の仕方とは違った新方式を生み出すか、それともそれを回復するかという岐路にあるのが現状といえよう。

認知基盤という人間にとって不可避のものがあ、長期にわたって適応してきたからには、後者の回復路線を現代的やり方でとるのが最も近道で効果があるはずである。住民が固有の歴史を発見・再認識することは地域活性化にとって重要な基盤であり、かつ大きな設備投資などを必要としない——筆者らが当初は気づかず、三島村での活動を通じて自覚するようになった立場はこのようなものである。

3. 三島村ミュージアムプロジェクトの活動報告

我々は2009年から三島村での調査を継続してきた。最初期には筆者らが代表者となり、鹿児島国際大学理論考古学研究室を母体にした構成員で実施し、以来、筆者らのプロジェクトや同研究室の中園聡教授を中心とした村の事業への協力、筆者らとジョイントした活動や調査研究

など、活動が深化・派生しつつある¹。その間、多くの方と知り合い、またコミュニケーションをとり続けてきた。筆者らのプロジェクトは、最初期からの土台の上に実施可能であったといえよう。三島村に限らず、外部の研究者（よそ者）がある日突然やってきて、すぐに聞き取り調査や実践的調査が開始できるわけではない。本格的な調査をしようと思えば、住民の理解を得ることが必要で、信頼関係なしには何事も行えない。幸い、最近では調査に関わる学生の名前を覚えてくれたり、活動について大変興味を持ち、関わってくれたりする人が増えており、中には「畑仕事に見つけた」と土器や石器を教育委員会や我々に連絡してくれる人も少なからず出てきた。

ここでは、本プロジェクトに関わる活動を紹介するとともに、本事業とは直接関係しないが、文化財の利活用に関して今後の参考、指標になると思われる前記研究室の活動についても紹介する。

平成23年度村内遺跡発掘調査等事業現地报告会（2012年2月3日）（図1）

2012年2月、村教育委員会が主催する「平成23年度村内遺跡発掘調査等事業」に係る黒島平家城遺跡の発掘調査と遺跡の分布調査の現地报告会が、地元黒島大里地区²で実施された。大里地区だけでなく片泊地区からの参加もあり大いに賑わった。黒島平家城遺跡に関して、中世山城に関する講演や、発掘調査の成果の報告に加え、教育委員会のご理解により、川宿田が「三島村ミュージアムプロジェクト」について説明を行った。本プロジェクトを住民向けに直接、広く説明したのはこれが最初である。

また、学生の協力を得て、会場内で考古資料の小展示・解説も実施した。これは、今後の住民と協同した展示活動を意識した試験的なものである。展示物には、黒島平家城遺跡の出土品をはじめ、我々が整理を行った大里小中学校保管資料（川宿田・平川2012）などを用いたが、展示準備の途中、「さっき見つけた」と住民が青磁片を届けてくれる場面もあった。ここでは簡単に展示できることを確かめ、住民の反応を知るために、足の短い長机にサテン布をかけ展示台とし、そこに自主製作して持ち込んだ各展示物の解説プレート、展示解説パネルを並べただけの簡易展示ブースを設営した³。

講師の講演が終わると、参加者は展示ブースに詰めかけ、大盛況となった。熱心に解説を求める姿や、展示に見入る姿、また「昔、これと同じようなものを拾って小学校に持って行った」などの会話が多々みられ、夜9時ごろになったにもかかわらず、活気に満ち、こちらが予期し

¹ その他、タイでのOTOPに関する調査（川宿田・平川2012：388）、鹿児島県下甕島での観光講演会や住民との共同での文化財調査、同県口永良部島での調査、などに関わっており、本研究に影響する認識の深化や経験の蓄積があったが、複雑になるのでここでは割愛する。ただし、いくつかの例については簡単に本文中で言及する。

² 黒島には大里地区と片泊地区の基本的に2地区がある。

³ 以前に同会場や下甕島で、より簡単な展示を行ったことがあり、その経験を活かすことにした。



図1 現地報告会

1：住民へのミュージアムプロジェクトの説明 2～4：展示解説の様子

なかったほどの興奮の場となった。

その際に、参加者を対象とした文化財や博物館活動に対する意識調査アンケートを実施した。結果については後述する。

なお、2012年9月にも黒島平家城遺跡の発掘調査が実施され、筆者らも参加した。聞き取りその他で本プロジェクトに資する成果も得られたが、ここでは割愛する。

みしま研究会2012 (2012年6月9日) (図2, 3)

鹿児島国際大学みしま研究会と、科学研究費補助金・研究活動スタート支援「“極小規模離島村”における持続可能な博物館活動モデル構築のための実践的研究」(研究代表者・川宿田好見)の共催で、「三島の歴史遺産と島の可能性を考える」をテーマに研究会を開催した(川宿田2012)。鹿児島国際大学の視聴覚ホールを会場として、講演はいずれも本学関係者で実施した。村内の芸能(松原武実教授・研究会代表)、三島村を中心とする薩南諸島の山城(三木靖名誉教授)、黒島平家城遺跡(中園聡教授)に加え、「限界離島の挑戦」と題する提言(瀬地山敏学長)もあり、川宿田も本プロジェクトについて発表した(後述)。

一般参加者のほか、鹿児島市内在住の三島村出身者や村長以下の役場関係者も忙しい合間を縫って参加してくれた。学内からは学生や三島村で研究を行ったことのある教員の参加があっ

た。また、福岡県在住のシンガーソングライターで三島村のイベントにも参加している野田かつひこ氏が飛び入りで歌を披露し、開会を盛り上げていただいた。地域活性化の活動に携わる方々や、報道機関の方々の参加もあり、関心を持っていた。

川宿田は「三島村ミュージアムプロジェクトの展開」と題し、プロジェクト開始に至る背景とその内容、実施計画などについて講演した。参加者の反応は良く、活動への賛同を得ることができた。同時に会場ロビーでは、三島村の歴史をテーマとした写真展や、考古遺物などの展示も実施した。そこでは黒島平家城遺跡の出土品のほか、黒島在住の方が発見・保管している縄文時代後期の石銚を借用し展示した。また、研究会当日、黒島大里地区区長が、三島村最古の遺物で非常に珍しい縄文時代草創期の丸ノミ形石斧を持参され、急遽展示と解説を行った。このうち、石銚につ

いては、後日、国内最南端の石銚として、沖縄を除く全国各地の新聞に広く報道されることになった⁴。

講演、展示は総じて好評であった。「展示を三島村各地区でやってほしい」、「船（村営定期船みしま）の中でも展示してほしい」などの要望があったほか、学内からも「このままここに展示してほしい」などの声が聞かれた。また、市内在住の考古学関係者からは、三島村の考古学的意義を再認識した、考古資料を用いた新しい活動の形式ではないか、といった評価のコメントをいただいた。

三島村案内人養成講座（2012年7月23日竹島，8月18日硫黄島）（図4）

これは、三島村役場が企画し、全国旅行業協会鹿児島県支部・鹿児島県旅行業協同組合へ委託された2012年からの新規事業である。これは、三島村の村民が自らの言葉で島の良さを紹介できるよう、島の案内人育成を目的としたものである。上述のみしま研究会後、講演を聞いた鹿児島県旅行業協同組合職員から本事業と我々の活動との共通性が高いということで協力依頼があった。講師は、中園聡（鹿児島国際大学教授）、東川隆太郎（NPO 法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事）、川宿田の3名である。



図2 みしま研究会ポスター

⁴ 住民にとって、外部からの評価は重要であり、報道されたことは地元でも話題となった。



図3 みしま研究会

- 1: シンガーソングライター野田かつひ氏による飛び入り演奏
2・3: 講演の様子 4・5・6: 写真パネルや考古遺物の展示・解説の様子

竹島、硫黄島で実施したが、勉強会として実施された講座に集まったのは、地域住民である。地域活性化に力を入れる住民や学校教員も含まれ、どちらの島でも予期した以上に好評であった。竹島では、島内で発見された考古遺物や鬼界カルデラなどについてパネルを用いて紙芝居形式で実施したが、昭和30年代の地域の写真を用いてどの場所かを当てるクイズも織り交ぜた。クイズの問題の中には、竹島を知り尽くしているはずの住民が答えに窮するものもあり、参加者全員が躍起になって議論する一幕もあった。地域活性化の基盤は、外部から何かを移植することではなく、すでに存在する文化財を再発見することが重要であることを、よく理解してもらえたようである。翌日、港で別れ際に、参加者から「やはり再発見が重要ですね」と感

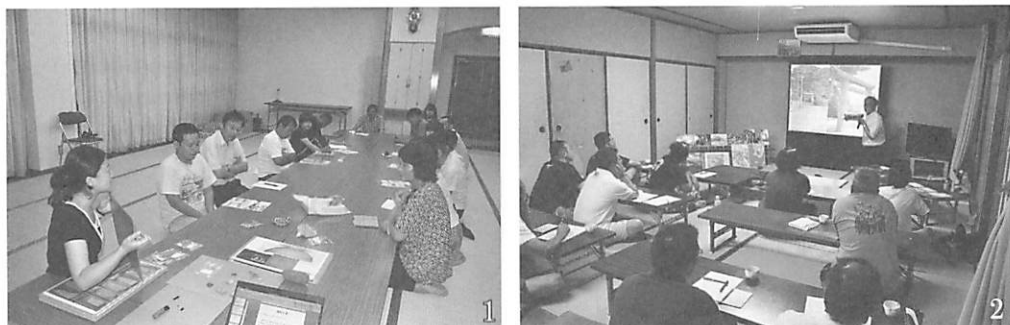


図4 三島村案内人養成講座（勉強会）

1：竹島 2：硫黄島

にたえない様子で言われたのが印象的であった。

一方、硫黄島では「考古学から見た硫黄島の魅力—歴史を発見・再発見する—」と題する講座を行い、何気ない石造物や石碑、近代の硫黄採掘所跡地などに着目し、島民が日頃当たり前と思っているものについて、考古学的立場から新たな価値付けを行った。講座を通して新しい知見を得た参加者からは、文化財の意外な重要性を知った、地元の文化財の価値を知り誇りに思った、などの意見が聞かれた。今後、黒島でも開講予定である。

村民文化祭 三島村生涯学習推進大会での講演と、展示（2012年11月3日）（図5）

三島村の村民文化祭は村民運動会と毎年交互に実施され、三島村の4地区（竹島、硫黄島、黒島大里、黒島片泊）を巡回しながら開催される。参加対象者は全村民であり、村の最も大きな催しの一つである。2012年は村民文化祭の年にあたり、黒島大里で開催された。当日は村民の三分の二ほどが集まり、全島の住民へ同時に本事業の説明や活動内容の紹介などができる絶好の機会となった。

今年の村民文化祭は、文化的・歴史的な意味合いを含めた「ふるさと再発見！活力とぬくもりにみちた地域おこし」がテーマであった。この機会を利用して説明や展示などを行うことは筆者らが希望していたことであったが、筆者らや鹿児島国際大学理論考古学研究室の活動を知る村民や役場の方々からの要望があり、三島村教育委員会より講演依頼があったことは幸いであった。講演は川宿田と平川が行った。

講演の他にも、みしま研究会で、現地でも展示してほしいとの要望が強かった写真展や各島の考古遺物の展示を行った。展示作業は住民と一緒にいき、写真パネルの選択やレイアウトについて、意見を出し合いながら作業を進めることができた。また、住民の中には長年ふるさとの写真を撮影している方がいるが、積極的に写真を提供してもらい、一緒に展示することができた。そのほか、三島村の文化財の記録に使用している3D レーザースキャナを持参し、それを展示ブースで実際に動かして、三次元化の方法について理解してもらうようにした。これに



図5 村民文化祭での活動

- 1: 文化祭での講演の様子 2: 住民と話し合いながら行った展示作業の様子
- 3: 写真パネルを見て話が弾む住民 4: 住民が持参した写真パネルの展示
- 5: 地元の文化財について熱心に解説を聞く住民
- 6: 教員とともに真剣に遺物を観察する生徒

は大人も子どもも興味津々であった。講演中、地元文化財を用いた3DCG動画を流したところ、村民からは感嘆の声があがった。

講演のテーマは「三島村ミュージアムプロジェクト 島は博物館」とした。各島の文化財の紹介とともに、これまでの活動の紹介や地元文化財を活用する方法、また今後の計画などについて講演を行った。講演後、展示ブースに戻ると、これまで「文化財には全く興味がない」と言っていた人が、講演で解説していた通りに自ら展示物の解説をしていたのには驚いた。そし

て、自ら畑で拾った遺物の話も語ってくれた。また、多くの住民や小中学校の教員の方々から声をかけてもらい、学校でもやってほしいなどの要望があった。島の歴史を村民が知ることの重要性は大きい、今後も三島村民が一同に集まる機会をとらえて、三島村の歴史を知る機会を是非設けたいという、役場の方からの話に勇気づけられた。

この文化祭を利用し、村民の文化財への意識を把握するため、参加者を対象としてアンケートを実施した。これについては後述する。

本プロジェクトに関連する諸活動としては、以下のものがある。

『三島村カレンダー2012』の作成（2011年）

三島村役場が作成する『三島村カレンダー2012』の編集作業に、鹿児島国際大学みしま研究会が協力し、筆者らも間接的に協力した。テーマは、「三島村 文化財再発見」であり、村民が日頃から目にし「当たり前」すぎて気づかない、あるいは、細部に注目したり異なる角度から見ると新しい発見ができる文化財の写真が選ばれたが、三島村での調査成果をもとに、各島の文化財に新しい価値付けや視点の方向付けをし、カレンダーをめくるごとに村民自身が自分たちの歴史や文化を再発見できるよう意図された。

広報みしま（2011年～）

発掘調査など関連する事業や、本プロジェクトに関連して行った活動や成果などは、これまで村の広報紙である『広報みしま』に多く掲載されてきた。本紙は村内でよく読まれており、そのおかげか、船員の方々と住民の方々から「載ってたね」、「いつも以上に真剣に読んだよ」などと、声をかけてもらうことが多々ある。本プロジェクトに関して理解の一助となっている媒体ということができる。

みしまワンデークルーズ（2011年～）（図6）

三島村からの委託を受けて旅行会社が実施する事業の一つで、定期船みしまを利用して3島を1日で観光するワンデークルーズである。これは、あまり触れることのない三島村の歴史、文化や自然について、多くの人々に実際に見て、聞いて知ってもらおう、という取り組みである。このツアーは昨年度から実施されており、もう一つの目的として、鹿児島港よりも三島村に近い位置にある薩摩半島南端の枕崎漁港への、定期船みしまの本格就航へ向けた試験運行の役割も果たしている。

この取り組みはこれまで数回実施されている。うち、2011年7月には川宿田が講師を務め、船内や各港で三島村の文化財の魅力を語った。2011年10月と2012年10月は中園教授が講師であったが、筆者らのうち平川が本プロジェクトの研究協力者として参加し、定期船みしまの客室内で初となる写真展示を行った。文化財と自然を主とした展示は、クルーズの参加者はもちろん、船に乗り合わせた住民も注目していた。



図6 三島村ワンデークルーズ

- 1: 船内での講演の様子 2: 船からみえる三島村の自然と地形の解説
3: 定期船「みしま」と参加者たち 4: 船内での展示の様子

4. アンケート調査1

本研究は、村民自らが主体的にそして継続的に自立可能な博物館活動のモデル構築を目指すものであるため、村民の文化財や博物館に対する意識の把握が不可欠となる。そこで、2011年、2012年と2回にわたりアンケート調査を行った。ここで得たデータは、その他の離島やへき地、また、博物館に恵まれない諸外国での博物館活動に役立てることを意図している。また、住民から随時行っている聞き取り調査の成果とアンケート結果を合わせて検討することで、村民の意識の変化をとらえたい。以下にアンケート調査の詳細を述べる。

4-1. 実施方法

前述のように、平成23年度村内遺跡発掘調査等事業現地報告会において、アンケート調査を行った。本研究として展示等の博物館活動を住民とともに実施するのに先立ち、調査回数が最も多い黒島でのアンケートを実施したことになる。

アンケートは11個の設問を設定し、選択式10項目、自由記述1項目である。回答はアンケート用紙に直接記入してもらった。回答は無記名とし、会場内で回収できたもの15件を有効とし

た。少数ではあるが、貴重な意見であるので、ここで報告する。

4-2. 結果と分析（図7・8）

それぞれの設問に対し、結果を示す。

設問1. 説明会に参加して、黒島の文化財について興味を持ちましたか？

村民の興味を5段階で質問した設問である。無回答1名を除くと、すべての回答者が「興味を持った」「やや興味を持った」を選択した。前者の割合が80%であり、後者が13.3%であった。

設問2. 遺物などの説明は参考になりましたか？

島内で発見された遺物などの展示・解説を受けての設問である。すべての人が「参考になった」と回答している。黒島で発見された遺物や発掘調査で出土したものを中心として展示を行っており、村民の関心が非常に高かったことは、直接展示解説をする時の反応からもうかがえた。このことから、本研究においてその土地のもの、すなわち「自前」の展示を行うことの重要性を確認することができた。

設問3. 黒島の文化財を島の人たちが知る必要があると思いますか？

すべての回答者が「思う」と回答している。文献資料などが非常に乏しい三島村において、文化財を手掛かりに過去を理解することがこの地の歴史を知ることと直結する。筆者らは地域活性化としての文化財や博物館のあり方を模索しているが、まずは地域村民の「知る」という行為とともに、理解がなければ継続的な活動は難しい。この設問によって本研究の基礎となる住民の意識を確認できた。

設問4. これまでに、博物館（種類は問いません）に何回行ったことがありますか？

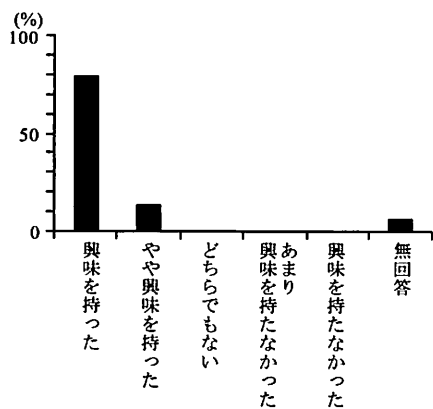
博物館経験を問う設問として設定した。0回が33.3%、1～3回が40%、4～6回が20%、10回以上が6.6%であった。33%の人が一度も博物館を利用したことがないという状況を把握することができた。この地区に住む教員の回答も含んでいるため、実際の村民の博物館経験はより低いととらえるべきであろう。

設問5. この2年間で、何回博物館に行きましたか？

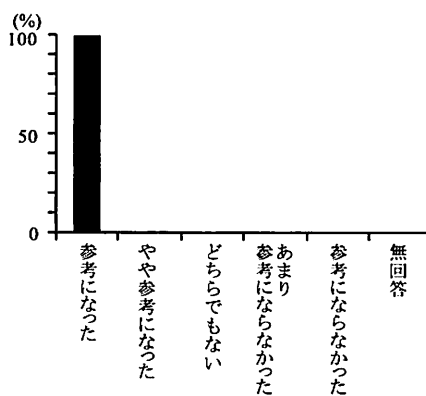
最近の博物館利用状況を問う設問である。0回が46.7%、1～3回が46.7%、4～6回が6.6%であった。

設問6. 黒島に地元の歴史の紹介や展示などができる小さな博物館のような場所が必要だと思いますか？

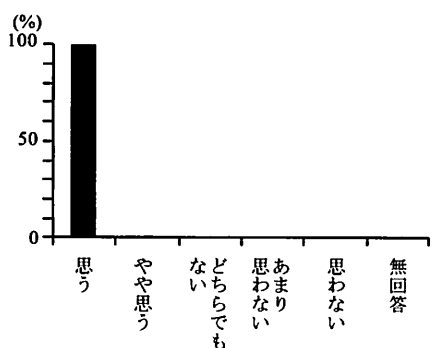
黒島には展示を行う専用施設はない。事前に講演の中で、専用の施設はなくても既存の施設を利用した展示などができるということを論じたうえでの設問である。何か見つかると小・中学校へ届けられ、そこで保管されてきたという背景もある。「どちらでもない」という回答が1名あったが、その他は「思う（73.3%）」「やや思う（20%）」と回答した。



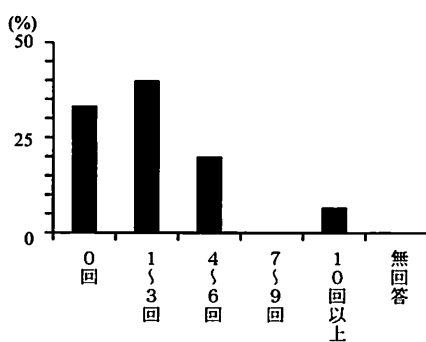
1. 説明会に参加して、黒島の文化財について興味を持ちましたか？



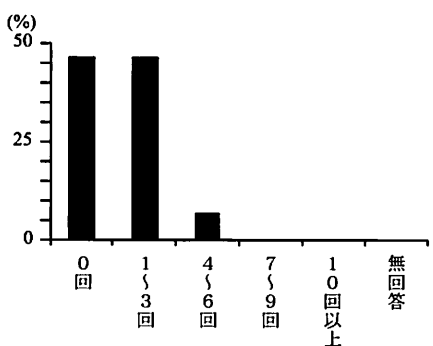
2. 遺物などの説明は参考になりましたか？



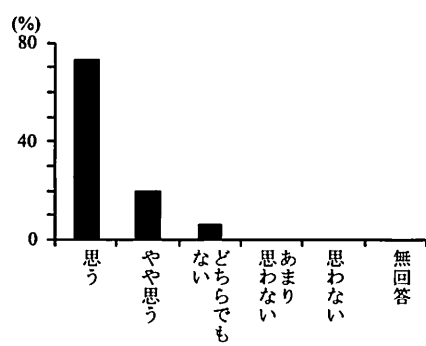
3. 黒島の文化財を島の人たちが知る必要があると思いますか？



4. これまでに、博物館（種類は問いません）に何回行ったことがありますか？

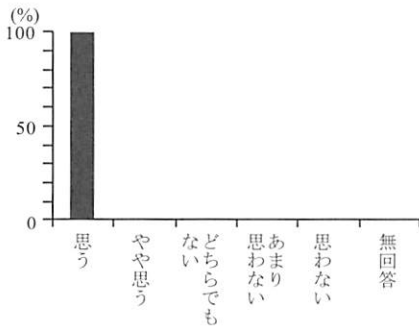


5. この2年間で、何回博物館に行きましたか？

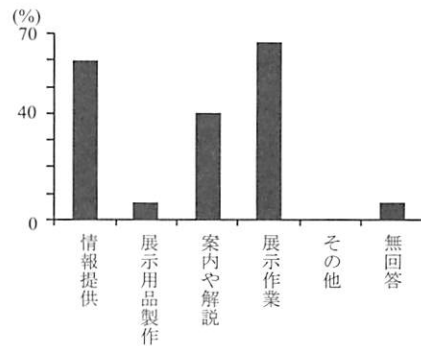


6. 黒島に地元の歴史の紹介や展示などができる小さな博物館のような場所が必要だと思いますか？

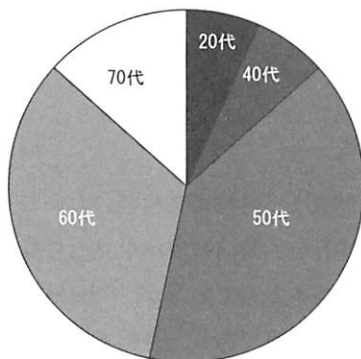
図7 アンケート調査1の結果 (1)



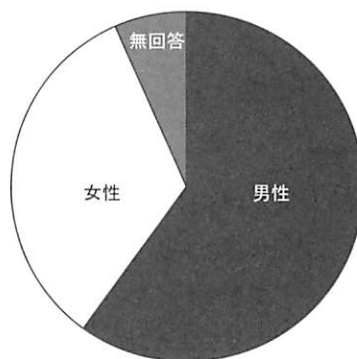
7. 黒島の歴史について説明できる人が必要だと思いますか？



8. 歴史の紹介や展示などを行う場所ができた場合、どのような協力が可能だと思いますか？ やりたい、できるかも、と思うものに○をつけて下さい（複数回答可）



9. あなたの年齢を教えてください



10. あなたの性別を教えてください

図8 アンケート調査1の結果（2）

設問7. 黒島の歴史について説明できる人が必要だと思いますか？

この設問に対しては、すべての人が「思う」と回答した。設問6で展示場所の必要性には「どちらでもない」と回答した人も、歴史を語ることができる人の必要性は感じていると判断できよう。

設問8. 歴史の紹介や展示などを行う場所ができた場合、どのような協力が可能だと思いますか？ やりたい、できるかも、と思うものに○を付けて下さい（複数回答可）

選択肢は「文化財についての情報を知らせる」「展示用品（箱など）の製作」「案内や解説」「展示作業」「その他（自由記述）」の5項目である。「文化財についての情報を知らせる」60%、「展示用品（箱など）の製作」6.6%、「案内や解説」40%、「展示作業」66.7%であった。村民による主体的な活動を継続できるモデル構築のためには、活動への村民の関わり方が重要となる。実際に何をするのか、というものを問うものではなく、選択肢として活動例を示すとともに関わり方のイメージを描いてもらう意図があった。今後の積極的な関わりが期待できる回答を得

ることができたと考えている。

設問9. あなたの年齢を教えてください

20代6.6%, 40代6.6%, 50代40%, 60代33.3%, 70代13.3%であった。説明会は19時より開始されたため、小・中学生の参加が少なく、回答を得ることができなかったことは残念ではあるが、他に行事が行われていたにもかかわらず黒島村民の三分之一にあたる人数が会場を訪れてくれたため、本研究活動を知ってもらうという当初の目的は果たすことができた。

設問10. あなたの性別を教えてください

男性が60%, 女性が33.3%, 1名が無回答であった。

設問11. その他、文化財や博物館などについてご意見をご自由にお書き下さい

自由記述の設問である。「できるだけ早く博物館活動の実施や人材の育成などの実現が求められると思います」との回答があった。

5. アンケート調査2

5-1. 実施方法

既述のように、2012年11月3日に行われた、3島の村民が集う三島村民文化祭において、アンケート調査を実施した。前述のように、展示活動も同時に行い、講演や展示を見た村民を対象としてアンケート調査を行った。前年度に実施した内容を基本としているが、3島4地区の対象者に合わせて文言などを変更した。アンケートの設問は全12項目であり、選択式11項目、自由記述1項目である。回答は無記名とし、アンケート用紙に回答を直接記入してもらった。分析には会場内で回収できた53件を有効とした。

5-2. 結果と分析 (図9・10)

設問1. 講演を聞いて三島村の文化財について興味を持ちましたか？

村民の興味を3段階で質問した設問である。「どちらでもない」「いいえ」と回答した人がそれぞれ1名ずつあり、その他はすべて「はい (96%)」と回答した。

設問2. 土器や写真などの展示を見て興味を持ちましたか？

結果は「どちらでもない」の回答が2名あり、その他はすべて「はい (98%)」と回答した。会場入口に三島村に関する写真パネルや遺物の展示を行い、展示活動に対する村民の反応を確認することができた。会場に入る前に必ず目にとまる場所に展示できたことが功を奏したようである。

設問3. 三島村の文化財を島の人たちが知る必要があると思いますか？

1名が「どちらでもない」と回答したほかは、すべて「はい (98%)」と回答した。様々な年齢、職業の調査対象者から、このような反応がみられることは今後の活動にとっても重要であ

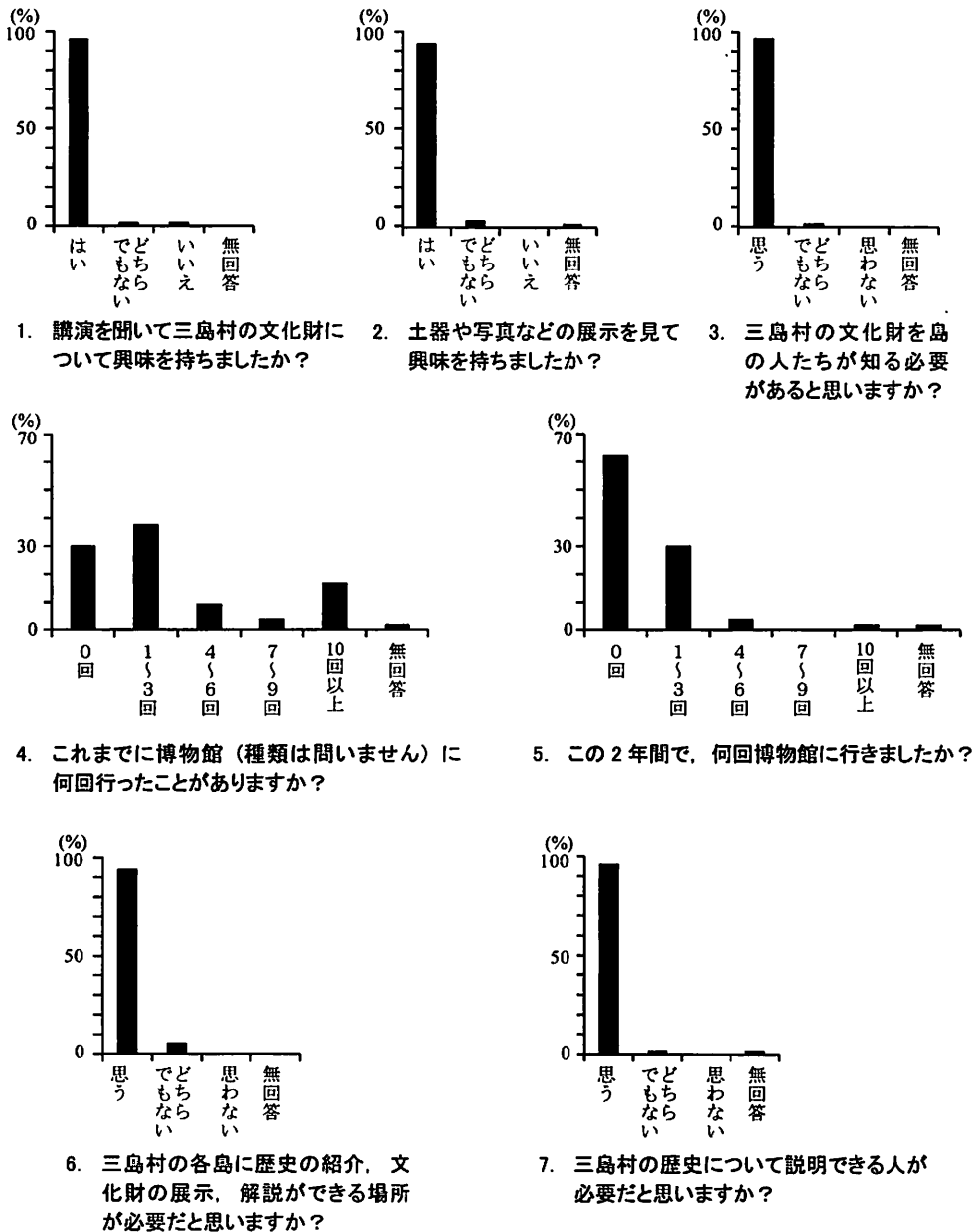
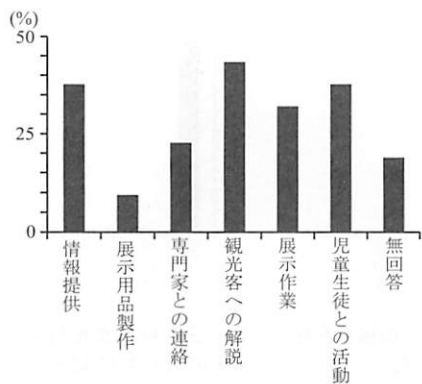


図9 アンケート調査2の結果 (1)

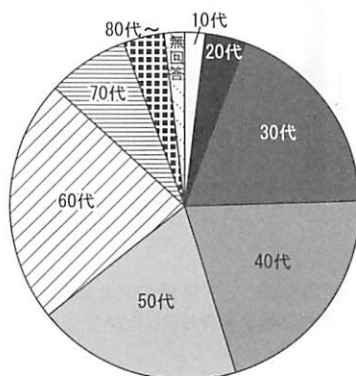
ろう。

設問4. これまでに、博物館（種類は問いません）に何回行ったことがありますか？

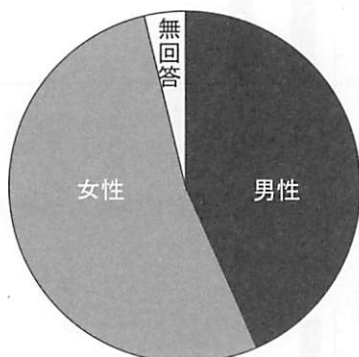
博物館経験を問う項目として設定した。0回30.2%, 1～3回が37.7%, 4～6回9.4%, 7～9回3.7%, 10回以上17% であり、無回答が1名であった。一見すると博物館経験が高いように読み取れるが、利用回数の多さは各島の教員や役場職員の結果が影響していることが後述の設問12におい



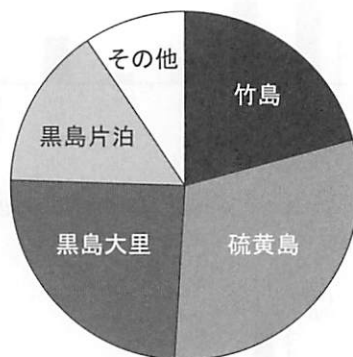
8. 歴史の紹介や展示・解説などを行う場所ができた場合、どのような協力が可能だと思いますか？やりたい、できるかも、と思うものに○を付けて下さい（複数回答可）



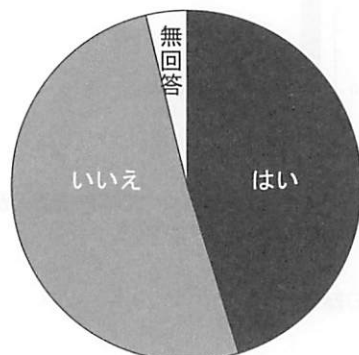
9. あなたの年齢を教えてください



10. あなたの性別を教えてください



11. 現在のお住まいはどこですか？



12. あなたは現在、三島村役場・三島村立小・中学校にお勤めですか？

図10 アンケート調査2の結果 (2)

で確認できる。ここで注目すべきは、一度も博物館を利用したことがないと回答する人が30%存在していることである。本研究において博物館利用格差について指摘しているが、これはその状況が読み取れる結果である。

設問5. この2年間で、何回博物館に行きましたか？

最近の博物館経験を問う設問である。0回62.3%、1～3回30.2%、4～6回3.7%、7～9回0%、10回以上1.8%、無回答1.8%であった。

設問6. 三島村の各島に歴史の紹介、文化財の展示、解説ができる場所が必要だと思いますか？

「思う」という回答が94.3%であり、「どちらでもない」という回答が5.6%であった。

設問7. 三島村の歴史について説明できる人が必要だと思いますか？

「どちらでもない」と無回答がそれぞれ1名あり、その他は「思う（98.1%）」との回答であった。設問6と併せてみても、「思わない」といった否定的な意見が非常に少ないことが分かる。

設問8. 歴史の紹介や展示・解説などを行う場所ができた場合、どのような協力が可能だと思いますか？ やりたい、できるかも、と思うものに○を付けて下さい（複数回答可）

選択肢は「情報の提供」「展示用品（箱など）の製作」「専門家との連絡」「観光客への解説」「展示作業」「児童生徒との活動」の6項目である。

「情報の提供」が37.7%、「展示用品（箱など）の製作」9.4%、「専門家との連絡」22.6%、「観光客への解説」43.4%、「展示作業」32.1%、「児童生徒との活動」37.7%であった。

設問9. あなたの年齢を教えてください

10代1.9%、20代3.8%、30代19%、40代21%、50代19%、60代23%、70代7.5%、80代以上3.8%、無回答が1.9%であった。

設問10. あなたの性別を教えてください

男性が43%、女性が53%、無回答が3.8%であった。

設問11. 現在のお住まいはどこですか？

竹島が21%、硫黄島が30%、黒島大里が25%、黒島片泊が15%、その他が9.4%であった。

設問12. あなたは現在、三島村役場・三島村立小中学校にお勤めですか？

45.3%が「はい」、50.9%が「いいえ」

設問13. その他、ご自由に感想・ご意見をお書き下さい

自由記述の設問である。回答には、本研究活動を応援するものや、村民としての要望、回答者自身の意識の変化を述べたもの、など大きく3つに分類することができた。以下に主要なものを原文のまま掲載する。

- ・今後もなお一層頑張ってもらいたい。
- ・ミニ博物館実現に全力で協力します。
- ・これからも三島村の活性化の為に協力をお願い致します
- ・このプロジェクトをもっとアピールし、観光客を増やして下さい。そしてIターン移住者

がふえるとよいです

- ・将来的にはジオパーク構想と関連付けていくことが効果的だと思います
- ・三島村の情報を全国に発信してください
- ・もっともっと地区民への情報が必要だと思います
- ・先生のお話を聞いてとても目の前が明るくなったといいますか島に住んでよかったと思ってしまいました。これから子ども達に夢を与えていただきたいです。
- ・90過ぎて出席して本当に良かったとおもいます。ありがとうございます。
- ・ふだんみえないこと気づかなかったことがたくさん聞けてすばらしかったです
- ・興味が出て色々な物を見て回りたいと思いました。

このように、本研究を継続するにあたり、心強い村民の反応をみることができた。同時に、文化財や博物館活動に対する意識の高まりを確認することができたことは大きな成果といえよう。

5-3. 多変量解析による検討 (図11・12)

ここまで、アンケート結果を述べてきたが、試みに本データを数量化理論 III 類で分析した。これは、本分析のような非計測的項目に対し「1」と「0」のダミー変数を与え、多次元データの構造の読み取りを目的とする手法である (林1974; 田中・垂水ほか1984)。

対象としたサンプルは、回収できたアンケート53名分である。極端に回答に偏りのある結果が示された設問 (設問1~3, 6, 7) は除外した。また、回答の少ない項目については、以下のように複数の項目をまとめて分析を行った (設問4 「4~6回」「7~9回」を「4~9回」とする; 設問5 「4~6回」「7~9回」「10回以上」の3項目を「4回以上」とする; 設問9 「10代」「20代」「30代」の3項目を「10~30代」とする; 「70代」「80代以上」の2項目を「70代以上」とする)。設問4・5・8・9・10・11・12における各選択肢を〈カテゴリー〉とし、回答者に便宜的に番号を付けたものを〈サンプル〉として扱う。

結果は、カテゴリー (選択肢) とサンプル (回答者) に分かれて出力される。まず示される固有値を確認すると、I 軸が0.431, II 軸0.277, III 軸0.230である。I 軸と II 軸の間に比較的大きなギャップが確認でき、II 軸と III 軸では、漸減している。III 軸以降の値についても意味のある構造が導き出される可能性があるが、ここでは I 軸と II 軸に注目し、最も意味があると考えられる特徴について検討したい。そこで I - II 軸の二次元散布図を示し、カテゴリー・プロット図とサンプル・プロット図を対比できるように上下に配置する (図11・12)。

カテゴリー・プロット図から確認する (図11)。I 軸の中でも博物館利用回数に注目すると、プラス側に博物館利用でも回数が多いもの、マイナス側に「0回」などの少ないものが示されている。また年代に着目すると、プラス側に「10~30代」「40代」「50代」が布置されるのに対

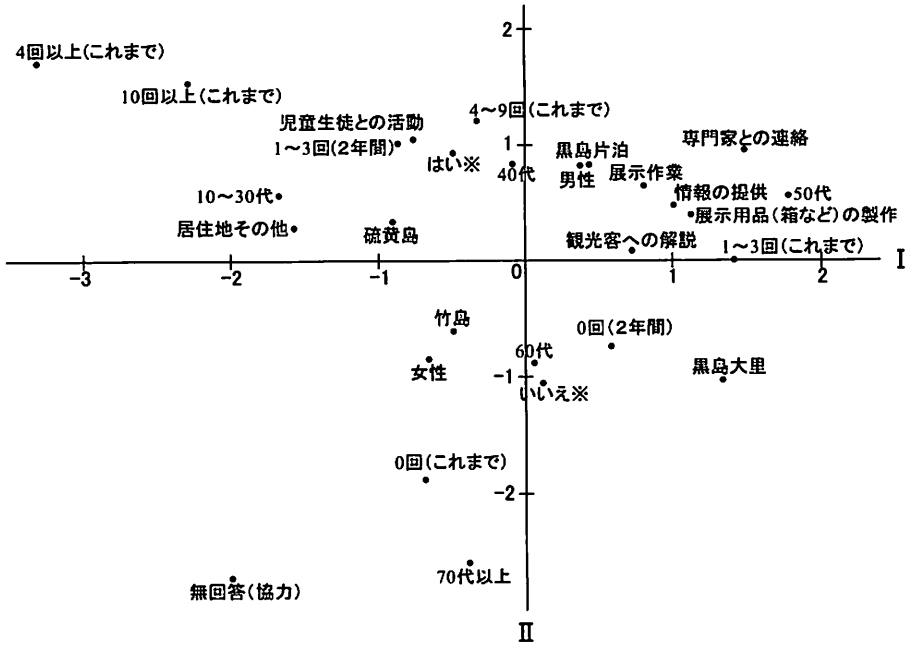


図11 カテゴリーの散布図 (I - II 軸)

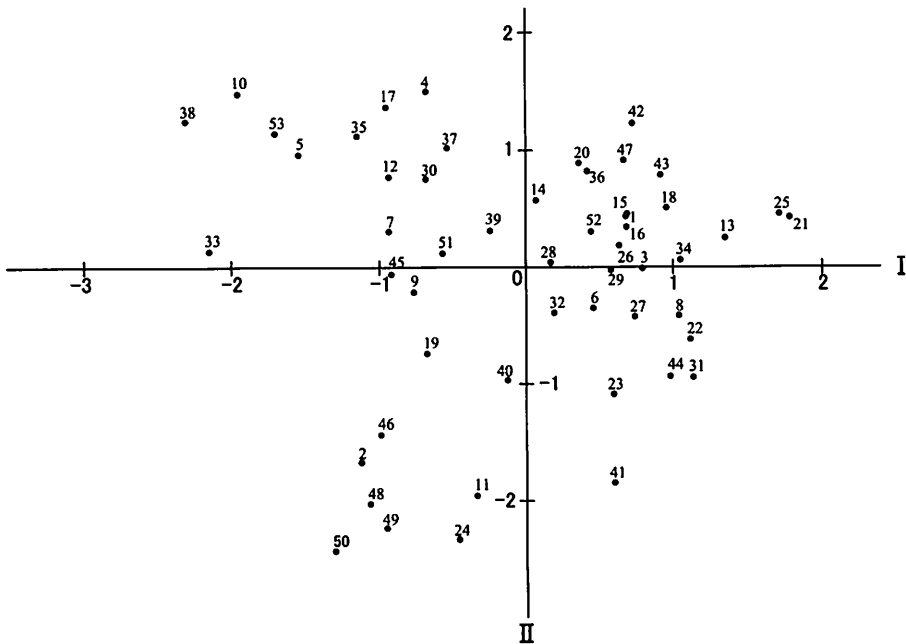


図12 サンプルの散布図 (I - II 軸)

し、「60代」「70代以上」がマイナス側に布置される。これらの情報から、I軸では“博物館経験の違い”を説明しているようである。年代をみても60代や70代といった項目がマイナス側に付置されており、博物館との関わりを持つ機会が極端に少なかったと考えられる年代が示されていることでも説明ができる。また、「役場・学校関係者」の項目や「児童生徒との活動」などもプラス側に付置されており、“役場・教育関係者と地元村民”の違いも併せて読み取ることができる。よって、I軸では「博物館経験の多い、役場・学校関係者」がプラス側に、「博物館経験の少ない地元村民」がマイナス側に示されているようである。II軸では黒島の2地区がプラス側に、竹島・硫黄島・その他の居住地がマイナス側に付置されていることから、居住地が三島村3島4地区と「その他」での地域的な特徴が示されているようである。特に、黒島では黒島平家城遺跡の発掘調査や、筆者らが最も頻繁かつ密接に活動を行ってきたため、考古学や文化財、博物館活動などへの接点が多くあったことがこの結果に影響していることも考えられる。サンプル・プロット図(図12)からも同様の結果が確認できる。

また、現在の居住地が3島のいずれかであるサンプルのみを抽出し、島に住居を構える村民のみを対象とした分析を行った。結果は、I軸が「博物館経験の違い」、II軸が「地域差」を読み取ることができ、すでに述べた、全53サンプルを対象とした結果と同様の結果が導き出された。

6. アンケートを通してみてきたこと

博物館活動に対して、村民の理解が得られたことがアンケート結果から読み取れた。これは、自らが住む島の新たな魅力をまさに再認識し始めている状況だといえよう。ここで注意すべきなのが、2回目のアンケートで回収できたのは各島からの参加者それぞれ三分の一程度であることや、前後2回のアンケートでは対象の違いもあり、本プロジェクトの活動の効果自体を明瞭に読み取することは難しい。また講演や展示の直後であることなどもバイアスといえよう。しかし、日頃の聞き取りや住民との交流などを通じて、住民の意識が向上していることは間違いない。アンケート結果からも、少なくとも村で博物館活動を牽引するには十分な人数が、本プロジェクトが主張する意義や活動を好意的にとらえ、積極的な協力さえ申し出てくれることは、貴重なケースといってよいであろう。

コミュニティが小さいことで、村民一人ひとりの存在が非常に大きな役割を果たしていることも、度重なる調査で確認できている。特に、コミュニティにおいて主要な立場にある人々が、各地区に存在し、我々の活動を機になんとか村の活性化の糸口としようと真剣に考えていることがうかがえる。

また、一定期間で異動となる小中学校教員の反応も重要であろう。アンケートとは直接関係ないが、村民文化祭では教員の方々から様々な要望・意見を聞くことができた。地元文化財を

用いた博物館活動は、子どもたちが地元に対する誇りを感じるようになるといった意見や、講演を聞いた感想として、考古学は敷居が高いように思えたが大変面白かったなどの意見が聞かれた。誇りを思える／感じるという点においては、アンケートの自由記載欄に書かれた村民の意見・感想からも分かる。

そのほか、あらゆる立場の方々から共通して聞かれたのが、「(活動を) 急いでほしい」という意見である。これは、島のコミュニティが崩壊してからでは遅いという、危機感の表れであり、切実な要望であることが聞き取りから判明した。自ら努力せず外部にまかせようというのではなく、自分たちにできることは行うから一緒にやってほしいということを意味するものであった。

7. おわりに

本論では「三島村ミュージアムプロジェクト」の活動や、その中で実施したアンケート結果について述べてきた。これから分かることは、地域活性化には村民の意識の活性化が第一であるとともに、これこそあらゆる活動における基盤であるということである。我々の活動目的は、離島・へき地におけるその地域に適した新しい博物館のモデルの構築であるが、村民の意識の活性化なくして成功し得ないものである。

本活動は、文化財という地元の歴史に密着した資料を用いたものであることから、博物館のモデル構築と地域活性化の両方を同時に実施できている。これはひとえに、地元の文化財という全ての村民に等しく関わる“歴史”を対象としているからである。よって、これまでの活動を通して、考古学や文化財が地域活性化に大変有益であることが実証されてきているといえよう。

実際に、文化財に対する理解やそれによる活性化は目を瞠るものがある。展示会で興奮した様子や、真剣に講演に聞き入る姿はもちろん、また何よりも村民自ら率先して展示解説を行う行為は、まさにその典型であろう。また、近年の地元村民からの積極的な情報提供もその効果の一つである。このように、村民が自主的に行動を起こすことこそ、本事業の最重要課題である。なぜなら、我々の活動スタンスは、これまでの考古学講座や遺跡の現場説明会で一般的に実施される啓蒙主義的な情報提供に陥ることなく、村民と一緒に活動し、村民の自主性・積極性を育むことを目指しているからである。このことから、我々は、これまで村民が当たり前として「気づかなかったもの」に対して、考古学的知見から新たな価値を見出し、村民と共に再発見していくことこそ本研究で目指す独自の博物館活動に繋がっていくと考えている。

村民が考古学や博物館活動を通じて自分たちの過去の歴史に“気づき”を得ることこそ重要である。村民が自主的に“気づき”を得れば、自ずと文化財以外の様々なもの（植物、カルデラ、天然記念物、地質、生態系、伝統、祭りなど）にまで意識が向くであろうし、そうなれば

我々研究者が仲介者として入ることなく、村民自身で博物館活動などを実施・継続していくことが可能となるであろう。これは本事業における将来的な目標である。

我々の活動が村民から理解を示してもらえるようになった今、以前よりも具体的な活動を推進できる環境は整った。また、村民の意識も高まりつつあるため、精力的に博物館活動の新たな展開が期待できる。今後も積極的に村との関わりを持ちつつ、さらなる博物館活動の展開を進めていきたい。

謝辞

本研究への研究協力をいただいている中園聡先生をはじめ、鹿児島国際大学国際文化学部理論考古学研究室のみなさんには大変お世話になった。調査に同行し、展示や聞き取り調査など様々な活動で献身的に協力していただいた学生のみなさんに感謝いたします。また、同大学短期大学名誉教授の三木靖先生、同大学音楽学科教授で鹿児島国際大学みしま研究会代表の松原武実先生には多くの励ましとともに、多大なるご協力、ご教示をいただいた。また、三島村村長日高郷士氏、教育長柿木正敏氏をはじめとする三島村役場・教育委員会の方々、中原義範、大山辰夫、徳森孝一、山之内清人、日高重行、山田和広、日高政行、日高覚、下村時美、下村喜久子、宮田實美、日高武二、杉本義松の各氏には特にお世話になった。また、鹿児島県旅行業協同組合魅旅の方々には三島案内人養成講座等で大変お世話になった。その他、三島村各島のみなさんには大変お世話になっている。今後の活動においてもご協力を願う次第である。

付記

本稿は、日本学術振興会・科学研究費補助金・研究活動スタート支援「“極小規模離島村”における持続可能な博物館活動モデル構築のための実践的研究」(研究代表者 川宿田好見 課題番号: 23800069) の成果によるものである。

文献

- 藤本理弘 (2011) 「情報化による地域活性化の可能性」『地域政策研究』13 (4): 147-157.
橘詰登 (2003) 「農山村自治体の地域活性化診断」『農林水産政策研究所レビュー』8: 10-17.
林知己夫 (1974) 『数量化の方法』, 東京: 東洋経済新報社.
平川ひろみ・川宿田好見・太郎良真妃・江神めぐみ・中村有希・中園聡 (2012a) 「鹿児島県三島村における考古学的・博物館学的実践—三次元レーザー स्क্যানナーを用いた物質文化の記録とその利用を中心に—」『日本情報考古学会講演論文集 (第29回大会)』, 9: 17-24
平川ひろみ・川宿田好見・太郎良真妃・中村有希 (2012b) 「考古遺物における三次元記録と観察—学術的価値の強化・パブリック考古学・博物館学—」『日本情報考古学会講演論文集』, 10: 3-10.
平川ひろみ・川宿田好見・太郎良真妃・中村有希・中園聡 (2012c) 「鹿児島県三島村黒島の滑石製石鍋—文化財の記録と博物館活動の一環としての三次元化を兼ねて—」『鹿児島国際文化学部論集』13 (2): 165-177.
川宿田好見 (2012) 「「みしま研究会2012—三島の歴史遺産と島の可能性を考える—」を考える」『広報み

しま」, 478: 4-5.

川宿田好見・平川ひろみ (2012) 「離島における新しい博物館活動のモデル構築へ向けて—鹿児島県三島村を対象として—」『鹿児島国際文化学部論集』12 (4): 375-392.

松本直子 (2006) 「縄文のイデオロギーと物質文化」『心と形の考古学—認知考古学の冒険—』, pp. 79-100, 東京: 同成社.

高瀬武典・伊藤理 (2007) 「VI 地域活性化の共通課題—英国小売商業地区活性化政策を事例として—」『社会変動と関西活性化』144: 133-147.

田中豊・垂水共之・脇本和昌 (編) (1984) 『パソコン統計解析ハンドブック II 多変量解析編』, 東京: 共立出版.